

トランプ大統領は米国の医療を変えるのか？



東京医科大学病院 渡航者医療センター
教授 **濱田篤郎**
Atsuo Hamada

ブラック・ジャックが活躍する国

手塚治虫の代表作である『ブラック・ジャック』の実写版がアメリカで制作されるというニュースが2012年に流れた時、筆者はなるほどと思った。この作品では主人公が手術代として患者から高額な医療費を請求するが、それは典型的なアメリカ式の医療だったからである。

日本では、医者が診療の見返りに高額な医療費を請求することを容認しない風潮がある。その一方、海外の多くの国では「医は算術」という考えが定着しており、医者は技術レベルに応じて料金を徴収する。この傾向が特に強いのがアメリカである。だから、この国ではブラック・ジャックの医療行為を容易に受け入れることができるのだと思った。

こうしたアメリカ式医療について身をもって体験したことがある。それは私がクリーブランドに留学した1984年のことだった。

「次回からは別の産婦人科医に」

当時、私は熱帯医学の研究のため、アメリカ・クリーブランドの大学病院に留学していた。留学生活が始まって2カ月後、妻が妊娠し、私は大変慌てた。なぜなら、私たちは医療保険に加

入していなかったのだ。すぐに留学先の上司に相談したところ、「まずは、専門のドクターの診察を受けなさい」と、上司の友人である産婦人科医を紹介してくれた。

私は妻とそのドクターのクリニックを訪ね、高級ホテルのような部屋で診察を受けた。しばらくしてドクターが満面に笑みを浮かべ診察室から出てきた。

「おめでとう、奥さんは順調に経過していますよ」。

「ありがとうございます。それで、今日はおいくらでしょうか？」。

「あなたは留学生だから、無料でいいです」。

私はほっとしたが、次の言葉が胸に刺さった。

「でも、次回からは別の産婦人科医にかかってください。あなたのような留学生では、私の診察代はとて払えませんから」。

『ブラック・ジャック』の中にも貧しい患者からはお金を受け取らないというシーンがあるが、それを思い出させる言葉だった。

平等ではない医療保険制度

日本では健康保険制度の下、国民は平等に医療を受けることができるが、アメリカは自由競争の国で、お金を出せば最高の医療を受けるこ